ABIC 国際社会貢献センター
Information Letter

No.18 2007年3月

ODA関連
コロンビア共和国マニサレスより …… 2
20年ぶりのパナマ …… 3

自治体・中小企業支援
IT関連ベンチャー支援活動 …… 4
岐阜県海外ビジネス人材育成塾研修「リスク管理」 …… 4

教　育
大学での講義を終えて …… 7
ABIC・関西学院大学共同プロジェクト
『現代の総合商社』出版記念シンポジウムを開催 …… 8
大津市立粟津中学校へ5年目を迎えた講師派遣 …… 9

留学生支援
東京国際交流館「日本語広場」講師随想 …… 10
「交流館フェスティバル '6」に参加 …… 10
交流館での活動に新たな広がり …… 11
留学生家族の育児・健康相談サポート
留学生家族の入園・入学サポート
留学生と小学校生徒との交流支援

ABICへのメッセージ
ABICの大学講座開設を振り返って …… 6

私のボランティア活動
車で走った「箱根駅伝」 …… 13

エッセー
新上海から　的士（タクシー）に乗って …… 14

書　評
『昭和33年』 …… 5

新刊紹介
実務家の机上にこの1冊!『貿易英語』の使い方 …… 7

事務局だより
ABICコーディネーター有志 上海へ！ …… 15
日本語教師養成講座　第2期生募集 …… 12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター（ABIC）　http://www.abic.or.jp
Action for a Better International Community

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル6階 ㈳日本貿易会内
Tel : 03-3435-5973　Fax : 03-3435-5979
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒552-0021 大阪市港区築港2-8-24 pia NPO 4階 413号室
Tel & Fax : 06-4395-1188
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

本誌の著作権は発行者に帰属し、無断転載・転送することを禁止します。

ODA関連

コロンビア共和国マニサレスより

JICA海外シニアボランティア
コロンビア貿易振興
高橋（たかはし） 一郎（いちろう）（元 日立ハイテクノロジーズ）

コロンビア共和国の首都ボゴタ市から双発のプロペラ機で北西へ約280km、時間にして約30分飛行するとカルダス県の県庁所在地であるマニサレス市に到着する。

支援企業との打ち合わせ　筆者（左側）

チリから北上するアンデス山脈がコロンビアで3つに枝分かれし西側からそれぞれオクシデンテ山脈、セントラル山脈、オリエンテ山脈となる。マニサレス市はオクシデンテ山脈とセントラル山脈の間に位置する標高2,100mの高原都市である。

2006年4月にJICAの海外ボランティアとして当地に赴任し、カルダス県庁の経済開発局国際関係課に席を置き、地元中小企業の輸出促進のための支援活動を行っている。

カルダス県はコロンビア第2のコーヒーの産地で、その大半は海外諸国に輸出されていて日本は米国に次いで第2番目のコーヒー輸出相手国である。また2004年に日本で開催されたサッカーのトヨタ・カップには地元のプロサッカーチームのオンセカルダスが参加しており、当地の人々は日本人に対してとても友好的である。

活動の拠点であるマニサレス市は人口約38万人の小都市で、山の背に細長く発展した周りを緑の山に囲まれた静かな街である。緯度でいうとマレーシアの首都クアラルンプールとほぼ同じ位置で、地図で見ると熱帯を想像するが、実際は年間の平均気温が摂氏18度で、大変過ごしやすい気候の地である。

県の失業率は2005年で13.6%と前年に比較して減少はしているものの依然として高い水準にあり、経済開発局の輸出振興の最大の目的は雇用機会を増やし、失業率を改善するということにある。

こうした背景の下で、どのような活動が適切で効果があるかを経済開発局、商工会議所と相談した結果、輸出支援を希望する中小企業を募り、その中から15社を選択し、現場に足を運び、支援活動を実践することにした。各企業により輸出の経験の度合いが異なるので、実態を調べながら、ある企業には貿易のイロハから、またある企業にはマーケティングの方法など、各企業ごとに指導プランを作成しながら支援活動をしている。現実には、製品の品質、それに関係する工場管理や人材育成の問題等、輸出する以前に解決すべき課題が色々あり、どこから手をつけたらよいか戸惑うことがある。

マニサレス市の中心部

これら諸問題については、今までの経験から助言できることは指導し、できるだけ専門の輸出に的を絞り支援活動をしている。しかしながら、貿易とはこうあるべきといったような押し付けではなく、しばらくは、相手企業との相互信頼関係を築くことに重点を置くべく、できるだけ相手の話に耳を傾けることにした。JICA作成の日本紹介シリーズのDVDを上映し感想を聞いたりしながら、徐々に相手の懐に入るように工夫をしたりもした。まだまだ不十分であるが、徐々に手ごたえを感じ始めている。前回の打ち合わせ時に出しておいた宿題をきちんとやっているかな、などと考えながら企業訪問をするのがだんだん楽しみになってきている。

2006年5月には米国との自由貿易協定が締結され、米国議会の批准を待っている状態だが、これが発効するとカルダス県を取り巻く貿易環境も劇的に変化することが予想される。赴任後1年が経過し、あと残り1年は、短すぎるが種まきだけはしておきたいと、せっせと畑を耕し水を撒いている日々である。

ODA関連

20年ぶりのパナマ

JICAシニア海外ボランティア
パナマ協同組合庁（IPACOOP）アドバイザー　森川 建夫（もりかわ たてお）（元 住友銀行）

IPACOOPによるパスイデサロージョ組合への資機材引き渡し。筆者は右から2人目。

早いものでJICA（国際協力機構）のシニア海外ボランティアとしてパナマに赴任し、まもなく2年が過ぎようとしています。20年前に仕事で家族を連れて4年間こちらに住みましたが、今回はその恩返しの気持ちもあって再び赴任してきました。

20年前との違いは何といっても1999年末のパナマ運河返還とそれに伴う米軍基地の撤退でしょう。運河地帯のアンコンの丘に翩翻と翻っていた星条旗のかわりに赤、白、青のパナマ国旗が誇らしげに翻っているのを見て変化を実感しています。パナマの人達は以前よりも自信に満ち、誇らしげになったと感じます。去る10月には約6,200億円を投資するパナマ運河拡張計画が国民投票によって承認され、今後7年間は好景気が約束されています。

パナマ運河

一方で建築ラッシュに沸くパナマ市を少し離れると昔と変わらない景色が広がります。平坦な土地は大規模資本によるサトウキビ畑、水田、牧場等が延々と連なり、農地に適さない山の斜面は焼畑農業でほとんど木がなくなって、痩せた土地に零細農民が細々とトウモロコシ、豆などを栽培しています。

赴任先のIPACOOP（協同組合庁）ベラグアス県支部は県内にある19の協同組合を指導監督する官庁ですが、ベラグアス県はパナマの中でも最貧困地域で先住民も含め、数多くの貧農が住み、大半の農協はそのような零細農民で成り立っているため、その活性化、経済的発展をどのように促すかがIPACOOPにとって最大の課題でした。一昨年4月にシニアボランティア2名が配属されて、IPACOOPではProyecto Granja Familiar（家族農場自給プロジェクト）という零細農協組合員を対象にしたプロジェクトを去年1月から立ち上げました。これは県内11組合175農家を対象に自分の農地で家族が1年間食べていけるだけの食料を生産しようとするもので、まず農家の自助努力、次にIPACOOP及びJICAボランティアの営農指導、そしてJICA／日本大使館の資金援助という三位一体で成り立っているプロジェクトです。昨年1月から8月まではJICAのボランティア派遣スキーム、そして8月には待望の大使館の「草の根無償資金援助」約8万6,000ドルが実行されて本プロジェクトは順調に実施されており、目に見える成果が出てきました。

その一つであるブエノスアイレス村にあるノベブグレ組合を例に取ると、対象15農家に鋤、鍬、スコップ、手押し車など5セットを順番に貸して農民が自分の土地で畑を耕し水田を起こし塩ビ管で水を引いて、そこに供与したトウモロコシ、ユッカ、ニャーメ、水稲、豆などの種子を播いて育てる一方、現地にある雑草を刈って牛糞、馬糞と混ぜて有機肥料を作り、これを田畑に施肥してやるという、日本からみたらまことに原始的なやり方ではありますが、まずは自給自足を何とか達成させようとするものです。すでにいくつかの水田では第1回目の稲刈りが終わり、2回目の田植えをして稲が順調に育っています。

草の根資金授与式―シニアボランティアとトリホス大統領とラスバルマス組合代表

貧富の格差が中南米でも2番目というパナマで農協を通じて少しでも貧困削減に役立てればとの思いで活動してきましたが、まだまだ道は遠いと言わざるを得ません。幸いここIPACOOPベラグアス県支部は本プロジェクトの立ち上げにより見違えるほど活動が活発化しており、そこに明るい希望を見出しています。

自治体・中小企業支援

IT関連ベンチャー支援活動

漆崎 隆司（元 ニチメン）

ABICの紹介で、今日まで3年近くITベンチャーM社のお手伝いをしてきました。M社の事業は電子透かし技術の開発・販売が中心です。電子透かしというのは、印刷物やビデオ映像、音声などに人が感知できない形で情報を埋め込み、真贋の判定や海賊版の摘発、著作権者を検証したりする技術です。

米国では、運転免許証の偽造防止に使われています。また、映画界ではアカデミー賞の選考委員に配布するプレ・リリース版に電子透かしを入れて、海賊版が出回ったときに、誰に配布したプレ・リリース版が不法に流用されたかを特定できた事例があります。M社は米国D社からの技術導入のためにアドバイザーを求めたもので、初出勤するやいなや、D社の契約書案の翻訳を行い、すぐに顧問弁護士との会議に同行するという慌しさでした。

この種の商談では守秘義務契約書（NDA）から始まり、ライセンス契約書の締結に至りますが、経済的条件に加え、特にIP（知財）使用権の範囲、機密保持義務、補償義務など細かな規定が多く、私の主な仕事は英文ドラフトの邦訳と契約相手との折衝の通訳などでした。もちろん、私は弁護士免許を持たないので法的な助言はできず、最終チェックは顧問弁護士に依頼します。

難儀したのは邦訳です。アルク社の英辞郎（http://www.alc.co.jp）や法律英語辞書等も利用しますが、訳語が見つかっても、その訳語の意味が難解で説明を要する場合が多いのです。例えば、契約文の冒頭によく出てくる“in consideration of～”は、「～を約因として」と訳されます。米国ハーバード大ではこの約因の意味を説明せよという試験問題が出るほどやっかいな言葉です。estoppelの訳語である禁反語というのも耳慣れない言葉です。よく使われるproprietaryという言葉も訳し難い言葉です。法律用語が難しいのは司法試験を難しくするためではないかと勘ぐりたくなります。

その後一年間の約束で監査役を引き受けましたが、いま思い出しても冷や汗が出そうな失敗は、国内の取引先との争いで顧問弁護士が訴訟を避けて示談での解決を勧めてきたときのことです。私はてっきり弁護士のメールが私宛に社内転送されたものと思い込み、管理部長への返信のつもりで、「同弁護士は配慮の行き届いた弁護士だと思う」と伝えました。ところが、このメールは弁護士が管理部長と私宛に出したもので、私の返信は弁護士にも直接届いていました。同弁護士から、「お褒めいただき恐縮しています」との丁寧な返信を貰い、冷や汗が背筋を伝いました。悪口を書かずに本当に良かったと胸をなでおろしたものです。

昨年の12月で約束どおり監査役を降り、週3日出勤も終わりました。この2年半、IT業界の最前線に身を置かせていただき、退化する脳をいくらか活性化でき、若い社員と共に風通しの良い組織で楽しい活動ができました。退任後も引き続き非常勤のコンサルタントとして以前にも増して協力を求められることが多く、結構忙しくしています。①特定分野業界の②英語力と③契約書作成という3つの経験・知識を併せ持つ人材への需要は案外と多いのではないでしょうか。ABIC会員の積極的な活動参加に期待します。

自治体・中小企業支援

岐阜県海外ビジネス人材育成塾研修「リスク管理」

赤田 堅（元 丸紅）

ABIC中小企業支援グループの依頼により首記研修の講師を担当しました。1月23日、26日、31日の3日間、各日5時間、計15時間で、受講者は中小企業幹部の方々でした。

この話を引き受けました時、私には以下の3点が懸念材料でした。第1に「リスク管理」の範囲、第2に受講者の予備知識が不明、第3には15時間の時間配分でした。

第1については、主催者側とのメール交換により解決、第3の時間配分も各日、90分が3回と割り切り対応しました。問題は第2で、主催者側よりは、受講生の知識はまちまち、初心者をベースとして講義して欲しいということでした。しかし一方、テキストは書類として残ることもあり、またABIC代表という立場もあり、ある程度のレベルとすることで了解を取り、作成しました。

しかし、一旦講義を始めてみますと、これらの心配は単なる危惧に過ぎませんでした。質疑応答は当初より活発で、かつ実務に基づく質問が多く、直ぐに受講者のレベルの高

さに気が引き締まる思いでした。私も出来るだけ経験に基づく話をさせて頂きましたし、また内容説明についても、例えば、外為リスクは松坂と井川の契約金、金利リスクは日銀の1月の利上げ見送り問題、カントリーリスクはサハリン2と手近なトピックスを例題として説明しました。また、コンプライアンスについては、3県知事の逮捕、雪印、不二家、AFT・EPAは東アジアサミット（1月、フィリッピン）、環境問題は昨年11月ナイロビで開催された地球温暖化防止締約国会議。この他、B/S、P/L、新会社法（昨年5月）、契約、輸出入関連法規、特恵関税、クレーム、仲裁、P/L法、ダンレポート等々が講義内容でした。

私は、入社2年目の1961年から2年間全社のD/P、D/Aを1年上の先輩と二人で担当しておりました。当時は繊維輸出が盛んなりし頃で、輸出手形保険の具体例については、こと欠きませんでしたし、また駐在18年を含め中・長期出張を含めますと20数年間、中南米に居りましたから、リスク管理のケース・スタディーについても、体験談を話しするだけで教材となりました。

今回の講義を通じて痛感しましたことは日本の産業基盤の強さでした。今回の受講者の様な方々が支えておられると実感しました。事前準備に始まり、一番勉強させてもらったのは私自身であったと感謝しております。受講者に恵まれ本当に遣り甲斐のある3日間でした。

「武士の一分」に涙しました。まだご覧になってない方は是非ご覧下さい。講義の中で、中南米には明治の曽祖父母あるいは祖父母から直接学んだ大和撫子、あるいは大和魂を持った日系の若者が数多くいることを話しましたが、昔の日本は精神的に豊かでした。

書評

昭和33年

布施克彦著　ちくま新書　2006年12月10日発行　定価700円

国際社会貢献センターのコーディネーターとして活躍される布施克彦さんの新刊書が出た。布施さんは某商社から転職を経て会社勤めを引退後、当会NPOでの活動の傍ら毎年のように出版を続けており、本書は、映画「ALWAYS三丁目の夕日」の背景となった昭和33年（1958年）に焦点を当てつつ今日の日本を浮かび上がらせ、これから先の日本を見通そうとする。昭和30年代を黄金期とする言説もあるが、具体的な事象を比較検証すると夢と希望のある時代だったとは言えないことを立証している。政治経済から社会問題をさまざまな角度から検証しており、懐かしくまた面白く読める。

経済問題の論客だった笠信太郎が当時主張した「フロンティアのない経済の中での過当競争は、力ずくの気風を促し、強い者勝ちの世界を生み、道徳の堕落を生んでいる」ことを紹介し、昨今のマスコミ論調に重なっていること、日本人の性向である「未来心配性」と島国的発想が、今のグローバル時代も変わっていないことを指摘する。他方で、真面目で勤勉、さらに協調性、探究心、忍耐力などを兼ね備えた民族は日本人以外にいないと、将来の日本を文化大国であるとともに、従来同様、高度なモノ作りの技術に支えられた経済大国であると予想する。

本書では、日本の将来について少子高齢化の問題に触れていないものの、布施さんの著書『54歳引退論』を本人自身が実践しているごとく、中高年世代は若者の頼りなさを嘆き、昔は良かったと懐かしむばかりでなく、人生80年時代を元気に生きよとのメッセージが聞こえてくる。いろいろと思い当たることの多く、読んで楽しくなる本である。

（ABIC 理事長　三幣利夫（さんぺいとしお））

ABICへのメッセージ

ABICの大学講座開設を振り返って

名古屋外国語大学教授　辻 節雄（つじ せつお）

本学は2005年4月から「グローバルビジネスの最前線―国際ビジネスマンのプロジェクトX」と銘打って、ABICの大学講座を開設しました。受講生の評判が頗る高く、当初1ヵ年の予定を見直し、07年度も継続すべく新たな構想を練って準備をすすめています。

近い将来国際ビジネスの世界に入って縦横に活躍したい夢を抱いている本学の学生たちに、熟達した国際ビジネスマンとして活躍された総合商社のOBに教壇に立っていただき、ビジネス取引の実際を語って貰うこと。語られる内容をとおしてビジネス世界が求める人物像を学生たちが理解すれば、どのような姿勢で何を学ぶべきかを悟り、今後の勉学に確かな方向づけがなされ、実り豊な学生生活が期待できるのではないか、ということが開設の狙いでした。

大学担当コーディネーター和田稔、増田政靖、谷川達夫の三氏が、本学の意図するところを十分認識して下さり、初年度は1期アメリカ・オセアニア編、2期ヨーロッパ・アジア編につき、10名の講師によるオムニバス方式で実施することになりました。

各講師の略歴は文書で知らされているものの、実質的には初対面であり、いかなる見識をもたれ、どのような経験を有しておられるのか、独自に設定された講義のテーマにつき、どのような内容をどのように展開されるのか、その力量の程が未知であるという不安感が常に付き纏いました。回数を重ねるごとに、事前に講師とコミュニケーションを密にして当方の要望を伝え、レジュメと資料に工夫を加えていただくことにしたので、次第に不安感は和らぎました。

講師の方々はさすがに立派なキャリアを有する人だけあって、優れた見識と豊な経験にもとづくビジネス取引の実際が語られ、洗練された個性とユーモアに、いつしか学生たちは講義に引き込まれていくようでした。普段意識したことがなかった産業分野や国・地域に目を開かされ、ビジネス取引の実際につき体験談を伴った説得力のある説明に大いに好奇心を刺激された、と多くの学生が感想を寄せている。通常のカリキュラムを補完するのに最適な教科目として、ABICの大学講座を位置づけてよいと考えています。

もし、講師の方々に要望することが許されるなら、第一に、国・地域の歴史や文化を説き明かすにあたっては独断を避け、十分な準備と配慮をお願いしたいこと。第二に、もっと自信と確信をもって、国際ビジネス取引の実際を率直に語っていただきたいことです。毎時講義の末尾に設けたQ&Aで、本音で返答される講師の姿に感動を覚えた学生が沢山おりました。

提供される大学講座は、ABICと大学側との緊密な連携の上に創造的な目的と内容が設定されるとき、高い教育効果が達成されます。多くの大学がこの講座を活用されることを願っています。

教　育　　大学講座

大学での講義を終えて

志岐 眞弓（元 ガートナージャパン㈱）

2004年2月に、米国系ITコンサルティング企業ガートナージャパンを退社した後、たまたま目にした雑誌『AERA』の中でABIC会員が大学で講師をしている記事を読んだ私は、早速、ABIC会員登録をしました。2006年5月に文京学院大学で講義を、横浜商科大学では「国際経済事情」後期の「ビジネス・コミュニケーション」を、一橋大学大学院社会学研究科では「プレゼンテーション技法養成講座」を、念願であった立命館APUでは、「2006年度秋セメスターBusiness Communication」の講義をする機会を得ました。

立命館大学アジア・パシフィク（大分県別府市）では、第1回講義冒頭において大分県平松前知事が提唱された「一村一品」キャンペーン（2006年2月より経済産業省が実施）を紹介し、"Think globally, Act locally" というメッセージを伝えました。私がEU（欧州委員会）で広報文化担当官を務めていた際に平松知事には大変お世話になりましたので、恩返しが出来たと喜んでおります。

一橋大学大学院では、①ビジネス現場でのプレゼンテーションと②英語プレゼンテーションを講義しましたが、図、写真、イラストを挿入したPowerPointスライド作成は、受講生に役立ったと思います。

一橋大学大学院での講義

横浜商科大学では、初めに、「日本人として、国際人としてのマナーが肝心であり、プロフェッショナルとは、契約を交わし業績に対する対価としての報酬を得るのだから、プロの道は厳しい」と苦言を呈して、「自分が一体、何になりたいのか」そうした目標を早い時期に見つけて、誠実に邁進すれば、夢は叶うものだというエールを送りましたが、生徒から多くの反響がありました。外資系企業において、同僚や上司が外国人であったという経験談にも興味を示し

新刊紹介

実務家の机上にこの1冊！「貿易英語」の使い方

荒尾 紀倫 著　同文舘出版　四六判　定価1,800円

引き合いに対するオファーから、条件交渉、契約書の締結、船積み、輸出代金決済、クレーム処理、販売店契約に至る一連の輸出入業務のシミュレーションに基づいて作成された英文モデルレターおよび貿易書類を学習しながら、貿易に関連する英文読解および英作文を学ぶことができる。日本からの輸出に基づいてストーリーが展開されているが、輸出入のいずれにも利用できるように配慮されている。各レッスンでは、英文モデルレターおよび英文書類に関する解説、語句の注釈および邦訳、貿易実務の要点が解説されているので、生きた貿易実務を学ぶことができるとともに、輸出入実務に必要な英語表現を習得することができる。

筆者は、日商岩井㈱OB、国際社会貢献センター会員で、貿易研究会主宰者。日本貿易振興機構、海外職業訓練協会、早稲田大学他で貿易実務および貿易英語講座の講師を務めるかたわら、貿易コミュニケーション、貿易実務、貿易マーケティングを総合的に研究している。共著として「企業成功の多角化戦略」他があり、実務の経験に基づいた著書である。

（構成）第１部　取引先の選定から契約　　第２部　契約から代金決済
第３部　長期取引関係の確立　　付録　ビジネスレターの書き方

ていました。ビジネス現場から学んだ経験から常に伝えることは、「コミュニケーション不足」を挙げ、国際人=英語の出来る人ではないこと、「論理的思考」と「対人力」が必須のスキルであることです。

自己紹介をする際には、私のキャリアの歴史とその時代背景、今日に至るまでの「世界経済のグローバル化」に必ず触れます。講義内容は、一貫して「グローバル・ビジネスパーソンに求められるスキル」として、

1．言語（英語力）を含むコミュニケーション・スキル
2．ビジネス・スキル
3．プロフェッショナル・スキル

を挙げ、次に、「グローバル・マインドセット」5項目から「オープンマインド」と「Integrity」（有言実行）を強調します。私独自の教材として、マーケティング手法で知られるSWOTチャートを用いてWorkshop形式による演習「コミュニケーション・スキル分析」をし、その分析シートを基に「PDCAシート」を作成し、個々の「スキル目標シート」を作成します。一方通行で「聴く」だけの授業ではなく、インタラクティブ（双方向）で授業に「参画」させて個性を引き出すのに有効です。内容は少々難易度が高くても、大学院生や留学生であっても、私が真摯に「信念」を伝えると、学生にも「魂」が伝わるようで、最後に拍手を頂戴したりすると講師冥利に尽きます。今後も、より多くの機会を与えていただき、「異文化コミュニケーター」講師としての魅力をさらに高め、内容を充実させたいと願っております。

教　育　　ABIC・関西学院大学共同プロジェクト

『現代の総合商社』出版記念シンポジウムを開催

本誌前号（17号、2006年11月発行）の書評でご紹介した『現代の総合商社―発展と機能』（関西学院大学　土井教之教授、伊藤正一教授、ABIC増田政靖コーディネーター編　晃洋書房）の出版記念シンポジウムが2006年12月15日、大阪の関西学院大学梅田キャンパスで開催されました。

同大学経済学部では2002年以降、日本貿易会および国際社会貢献センター（ABIC）との連携により、学生に総合商社というビジネス現場の様子を伝える特別講座「経済学トピックスE」を開講してきましたが、その講義録をベースに本書が編纂され、2006年から正規の教科書に指定されたこともあり、同大学の産業研究所（所長：伊藤正一教授）とABICが協力して今回の開催となったものです。

同大学のホームページによる広報、ABICからの関西在住ABIC会員勧誘もあり、年末という時期にもかかわらず、約90人の聴講者で1405大教室はほぼ満席となりました。伊藤教授の司会進行により、平松関西学院大学学長、三幣ABIC理事長の祝辞、挨拶に続いて、三菱商事㈱代表取締役副社長上野征夫氏が基調講演を行い、冬の時代、氷河期などといわれた苦難の時期を乗り越えて、今や夏の時代といわれる総合商社の絶えざる変化と発展の秘密を総括されました。

引き続き執筆者を代表して土井教授、増田氏（三菱商事OB）、山下氏（伊藤忠商事）によるパネルディスカッションが行われ、総合商社が日本にのみ発展した理由などを中心に活発な意見交換が行われ、盛況裡に閉会しました。

なお「経済学トピックスE」の講座は2007年度にも継続されることが決定しており、ABICとしては引き続きベストメンバーの講師派遣を準備しております。

（関学・ABIC共同プロジェクト・コーデイネーター
宇佐見　和彦）

平松関西学院大学学長の祝辞

上野三菱商事副社長の基調講演

出版を記念して

教　育　　小中高国際理解教育

大津市立粟津中学校へ5年目を迎えた講師派遣

2002年から始まりました滋賀県大津市立粟津中学校への講師派遣は、今年で5年目になりました。この5年間で、延べ22名の会員が講師を務め、13ヵ国22コマの授業を実施しました。毎回、4ヵ国、5ヵ国といった複数の国々を4教室または5教室で同時並行して授業を行うもので、それぞれの国情を熟知したABIC会員を講師として派遣しています。

同校では国際理解教育の目的として生徒達に以下を指導している由です。

①世界の様々な国の状況やその国に伝わる伝統や文化を調べることより国際人としての感性を磨く。

②元駐在商社員の方々のお話を聞く事で国の実情を知り自らの生き方を深く考える機会とする。

③それぞれの国の中学生が、日本や日本人に対してどの様に見ているかを理解した上で、平和な日本に生きる自分達が出来ることを考える。

昨年12月8日に実施した授業は、3年生5クラス（40人／1クラス）を対象に、テーマは中東、ベトナム、ブラジル、アメリカ、中国の5ヵ国でしたので、それぞれの国に駐在経験のある5名の関西地区在住の会員を講師として派遣しました（下記、「講師一覧表」参照）。

授業に先立ち、生徒達は先生の指導の下、各クラスは、数班に分かれ、それぞれの国の生活、文化、歴史、気候風土、観光、教育、環境、仕事等について事前に勉強しました。それを生徒達で発表しあい、投票で一番評価が高かった班が授業当日の司会役を務めました。生徒達の事前の勉強ぶりと勉強の成果を纏めた壁新聞には大変感心しました。

講師陣

（順不同、敬称略）

講師名	元勤務先	テーマ
小口　良喜	元 三菱商事	イラン（および中東一般）
喜多　創平	元 日商岩井	ブラジル
椚座（くぬぎざ）　武敏	元 日商岩井	ベトナム
山本　博勝	元 三菱商事	アメリカ
大西　稔男	元 三井物産	中国

それぞれの講師は担当の国についてのレジュメ、パンフレット、写真、民芸品等を準備し、学校側には地球儀とOHPを準備してもらうなど、工夫を凝らし、楽しく、役に立ち、印象に残る授業を行うべく努力しました。

溝上校長先生、松村教頭先生、ご担当の大倉千仁先生からお褒めの言葉を頂き、また、後日生徒の皆さんから各講師に感想文が寄せられました。講師一同、感謝の気持ちが込められた感想文に感激しました。逆に私達が若い力を貰ったようで、感謝の気持ちでいっぱいになりました。今後とも同校とABICの繋がりがさらに発展し、続いていくよう尽力していく所存です（これぞ私が好きな今回も授業で使いました言葉“教学相半”です）。

（関西デスクコーディネーター　大西（おおにし） 稔男（としお））

留学生支援

東京国際交流館「日本語広場」講師随想

鈴木 誠一（元 日商岩井）

定年後軽い気持ちで始めた日本語教師養成科420時間の研修が終了間近の2001年の10月末頃、ABICから現役時代の経験を生かしたボランティア活動への参加案内が来ていた。

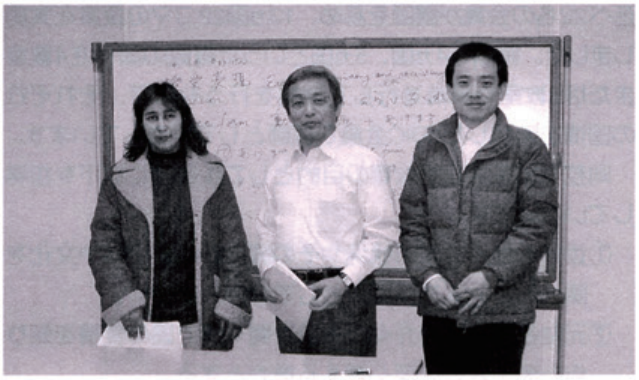
ABICの活動ジャンルの一つに国内での留学生支援があり、ちょうど日本語指導の分野で少しはお役に立てるのではと考え、修了証書を受けると間もなくABICの会員登録を済ませた。

2001年末には、ABICが東京国際交流館で留学生に日本語を指導する「日本語広場」の授業参観や前任者からの引き継ぎなどを済ませ、翌2002年1月から毎週土曜日午後4時に始まる日本語初心者コースの講師を務めることとなった。以来、土曜日の授業を3年、その後、火曜日午前の授業を2年務め、本年1月で6年目に入り、今では日本語講師中、最古参になってしまった。

「日本語広場」は、お台場にある東京国際交流館に居住する留学生やその家族を対象とした日本語を学習しながら、交流を深める場である。いつでも誰でも自由に参加できる仕組みにしたので、受講生が同時にレッスン・ワンからスタートした訳でなく、また、受講生それぞれの日本語レベルにもかなりの幅があるため、学校のような日々の授業の積み重ねによる一貫教育を進めていくことはできない。

一通り基礎学習も終わった頃に、日本語を全く知らない受講生が参加してきた時などは正に進退ここに窮まれりで、出入り自由な「日本語広場」である限り常に付きまとう厄介な問題の一つである。それでもその都度ピンチを切り抜けて来られたのは、初心者を引き受け、別メニューでレベルアップをしてくれた代々のコーディネーターの方々に負うところが多い。

振り返ってみれば、東マレーシア・サバ州にそびえる海抜4,100メートル、東南アジア随一の高さを誇る霊峰キナバル山山麓に発見された銅資源を開発するため、州都コタ・キナバルに駐在していた時のことが思い出される。現地日本人子女のために母親たちが手弁当で開いた寺子屋式小学校が当時の文部省から正式に日本人補習校として認可され、校長に就任した。待ちに待った日本からの小学校教員が正式に着任したのを見届けた後、任地を離れてたが、四半世紀以上も昔のことである。元々畑違いの分野で今こうして日本語講師を務めていられるのもどうやら昔々の彼の地にその原点があったのではと思えてならない。



受講生と筆者（中央）

今日まで何時も新鮮な気持ちで講師を続けて来られたのは、世界各国からの若くて優秀な留学生やその家族との新しい出会いに次々と恵まれたお陰であり、おそらく「日本語広場」のいつでも誰でも自由に参加できる仕組み、即ち出入りが自由であったからではなかろうか。

これからも「日本語広場」に集う受講生に対して、日本語学習が将来日本を離れてからでも必ず役に立つと信じつつ、特に基礎学習にはより重点を置き、限られた貴重な授業時間を有効に活用していくつもりだ。古来稀なる齢まであとわずかだが、この魅力溢れる「日本語の広場」で今しばらく新しい出会いを楽しみたいと思っている。

「交流館フェスティバル '6」に参加

昨年11月12日（日）に開催された恒例の東京国際交流館秋の文化祭「交流館フェスティバル '6」にABICも参画し好評を博しました。

留学生による各国お国自慢の屋台料理が人気を集める中、華道教室は活け花体験教室を開催しましたが、訪問者は昨年と比べ大幅に増え、約100名を記録して盛況でした。華道教室常連の留学生の皆さんが日頃の成果を発揮して指導に当たっていました。

また、書道教室は1年間の力作をまとめて展示して注目を集めていました。当日のフェスタの来場者数は、主催者によりますと、1,600名以上にのぼりました。

（留学生支援グループ）

留学生支援

交流館での活動に新たな広がり

関係各位のご支援のおかげで、ABICの活動は創立以来、国際ビジネスを通じて培われたノウハウや豊富な人材を活用して、多くの分野で順調な進展を見せてきました。ABICは現在の事業の一層の拡大発展を図るとともに、新しい分野を掘り起こして会員の皆様の活躍の場をさらに広げるとともに社会的ニーズに応えた公益性の高いサービスを、代償を求めずに提供する社会貢献・ボランティア活動も重視したいと考えています。

最近、原則無償のボランティアを募集するケースも出てきており、会員の方々の積極的ご支援のもとに、継続的に活動する「ABICボランティアチーム」もできました。東京国際交流館での活動の新しい広がりの一端をご紹介します。

〈留学生家族の育児・健康相談サポート〉

ABICはお台場にある東京国際交流館在住の留学生とその家族約1,000名を対象に、前頁のように日本語を通じての交流の場「日本語広場」や茶道、華道など6分野の「日本文化教室」の運営などの支援活動を進めてきました。

留学生たちはそれぞれ所属する大学で一定の健康管理サービスを受けますが、その対象とならない150名ほどの家族（若い妊婦や幼児が多い）の健康管理支援のため、交流館では、管轄の保健所から専門スタッフ3〜4名を招いて、2ヵ月に一度の育児・健康相談の場を設けています。しかし所定の2時間の間に30〜40名を超える親子が参加して対応しきれなかったり、より深刻な問題としては、日本語が不自由な家族との意思疎通を欠き、その故に参加を取りやめるケースも出ていたようです。

そこでABICはこの健康相談をより有効なものにするため、昨年11月からわずか1名のボランティアによる通訳支援を始めました。その後ボランティア確保に努めた結果、日本語、英語、フランス語、中国語（複数の地方語を含む）、スペイン語、ポルトガル語、韓国語で対応できる8名のボランティアチームができました。

その中の4名は子育ての経験を生かして、通訳サポートだけでなく、育児・健康相談でも活躍し、保健所スタッフからも大助かりと感謝されています。隔月第3木曜日に行われるこの育児・健康相談サポートは今後も継続し、参加可能のメンバーで対応します。

現在のボランティアチームのメンバーは以下の8名でいずれもABIC活動会員です（敬称略）。

① 曾美芳（台湾出身）東京経済大学コミュニケーション専攻・博士課程在籍。
② Tri Lestari Djamuhuri（インドネシア出身）東京大学農業経済専攻。

③ 単娜（中国出身）御茶ノ水女子大学大学院人間文化研究科国際日本学専攻・博士課程在籍。
④ 宮田恵子　東京外国語大学留学生支援の会ほか様々の奉仕グループで活躍。英語が堪能。
⑤ 阿部やよい　東京外国語大学留学生支援の会ほか様々の奉仕グループで活躍。英語が堪能。
⑥ 鍬形勲（元 伊藤忠商事）スペイン語とポルトガル語が堪能。
⑦ 安信映（韓国出身）日本語1級の資格を持ち英語と（もちろん）韓国語が堪能。
⑧ 王玲（中国出身）東京外国語大学交換留学生。中日通訳ガイドと日本語が検定1級の資格を持つ。

〈留学生家族の入園・入学サポート〉

国際交流館の留学生は大学院生以上で、家族帯同のケースがかなりあり、なれない土地での児童の入園・入学に当たっては通訳や書類書き込みなどのサポートが不可欠な親御さんが多いので、交流館側の要請にこたえて、ABICボランティアチームは本年1月より入園・入学のサポートも始めました。

留学生の入館は3〜4月と9〜10月に集中しますが、年中バラバラと入館者がいて、児童の入園、入学、編入のタイミングは一定しません。サポートが必要な日に、参加可能のボランティアが何人確保できるかが今後の課題です。第1回目のサポートとなった1月18日の江東区立ひばり幼稚園での入園説明会および第2回目の2月20日の体験入園では、それぞれ3名（宮田さん、阿部さん、Djamuhuriさん）と1名（宮田さん）にABICコーディネーター1名も参加し

て5組の親子を支援しました。

ひばり幼稚園の入園は、①入園願書提示・面接・入園許可②入園説明会と通園に必要な用品の注文③入園前の半日体験入園④注文品の受け取りと支払、の手順を踏み、今後もそれぞれの段階でサポートが必要となります。入園説明会と体験入園は、幼稚園側の説明が思いのほか詳細かつ煩雑なので、大勢の日本人入園者親子に混じってのささやき通訳では、ボランティア1名が1〜2名の親御さんしか支援できずご苦労があったようです。

〈留学生と小学校生徒との交流支援〉

品川区立源氏前小学校では、6年生を対象に英語教育・国際理解教育の一環として、毎月外国人を招き、やさしい英語での自国紹介の話を聞くプログラムを実施しており、ABICに講師派遣の要請がありましたが、講師の確保が難しいため苦慮しておりました。そこで、交流館にもちかけたところ、留学生の“国際交流”のための好ましい企画と評価され、在館留学生からの募集と推薦に協力してもらい、12月には学校側の要望どおりインドネシア出身で東京大学留学生のLestari Djamuhuriさんが選ばれ講師をしました。

Djamuhuriさんの授業が好評であったため、本年1月にも、

インドネシアを紹介するDjamuhuriさん

ガーナ民族衣装で記念撮影するSenayahさん

ガーナ出身で政策研究大学院大学留学生のMichael A. K. Senayahさんが、民族衣装持参で小学生と交流し、好評を博しました。学校側からはスリランカ出身者の推薦依頼もあり、この支援授業への支援はしばらく継続する見込みです。

日本語教師養成講座　第2期生募集

昨年10月より開講した日本語教師養成講座は第1期生27名が所定の100時間コースを3月末に修了見込みとなりましたので、第2期生の募集を行っています。

期間は本年4月10日より9月末、3クラス計36名の首都圏の会員およびご家族を対象とする特別短期養成講座です。第1期のご家族の受講者は5名に過ぎませんが、会員の配偶者、ご家族の方も多数受講されることを歓迎いたします。

なお、募集要領につきましては、2月23日付Eメールにて首都圏の会員の皆様にご案内済みですが、ここに改めてご案内いたします。

「日本語教師短期養成講座」

申込締切日　：　2007年3月30日（金）
期　間　　：　2007年4月10日〜9月末
受講日時　　：　下記のいずれかのクラスを選択のうえ週1回受講
①火曜日　10時〜13時
②金曜日　10時〜13時
③水曜日　17時30分〜20時30分
場　所　　：　社団法人 日本貿易会会議室（東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル6階）

受講料その他詳細は次にお問い合わせ下さい　：　日本語教師養成講座担当
E-mail：nihongo@abic.or.jp
TEL：03-3435-5973

私の
ボランティア活動

車で走った「箱根駅伝」

関東学生陸上競技連盟総務委員長　川西 勇夫（元 三菱商事）

皆さんは、お正月の「箱根駅伝」をお楽しみになれましたでしょうか？

「ゲイシャ」「キモノ」「ネマワシ」と同様に国際語となった「エキデン」は日本人が作り出したものです。中でも今やお正月の風物詩のひとつとなった「箱根駅伝」は1920年（大正9年）、東京高師（第1回優勝校、後の東京教育大→筑波大）、明治、慶応、早稲田の4校で開催され、今年で83回になりました。当初は、車も少なく、各種規制も無く、選手は日が暮れて真っ暗な箱根の山道を伴走者の掲げる松明の明かりを頼りに走り、ゴールでは提灯を持った地元の人に出迎えられた、などというエピソードが語り継がれております。

私は、学生時代陸上競技の三流選手であった縁でこの3年間箱根駅伝に関わっており、学生時代に走ることが叶わなかったコースを、ついに「車で」完走することが出来ました。

ABICが主として商社のOB・OGで支えられているように、箱根駅伝を主催している「関東学生陸上競技連盟」は関東地区大学の陸上部のOB・OGに支えられ、実際の力仕事は学生が中心となって、準備・運営しています。携わった役員・審判の数約1,000人、学生約1,000人、いずれもユニフォームと交通費だけのボランティア活動です。

ここでは伴走する車両の事情について多少述べてみたいと思います。

昔のように、自校の「桃太郎旗」を立てたジープやオープンカーを終始選手の横にぴたりと付けて、監督やコーチが上からメガホンで選手に指示を送り（「声掛け」という）、意識朦朧とした選手には校歌を歌って励ましたりした時代が懐かしい、何とか復活できないものかと多くの関係者や監督は願っていますが、二つの理由で、厳しい状況にあります。

一つは、交通事情です。報道の車両を除く競技関係車両は審判長の乗った本部車を先頭に、出場校20台、最後尾に緊急対応車（私が乗車した事故処理担当）と医務車合計23台の大行列です。出場校の車両には審判、監督、アシスタント、走路管理員と運転手の5名が乗車します。駅伝は、天下の公道を借りて行うため、交通規制を最短・最小限にとどめるよう考慮しており、警察当局の道路使用許可条件に細かく規定されております。例えば、23台の車両はスタートから品川までは、前年度の成績順に選手の後ろを一列縦隊で走行し入れ

緊急対応車の前で　右筆者

替えは出来ない、全ての乗務員は、車両の窓から顔や体を乗り出して指示を出してはいけない、監督の声掛けは決められた場所（1km、5km、10km、残り1km等）で1分以内とする、車両は選手の後ろ20mを走る、走者の順位が入れ替わっても100m以上開かないと車両の入れ替えは出来ない、選手・車両は中央線を越えてはいけない、箱根の下りでは、各校の車両20台は、箱根湯本で選手を待機・合流する（すなわち、選手は山道を一人で下る）等々。

もう一つは、テレビの完全生中継が第63回（1987年）から始まり、沿道に100万人以上の観衆が見守る中、監督、コーチがホットになり、ついつい「オイ、コラッ、死ね！」等の罵声を浴びせるのが沿道の観衆や、テレビを通じて茶の間の視聴者の耳に直に届き、「これが学生スポーツの指導者か！」「子供たちに聞かせられない！」とクレームが殺到するようになったため、車上からの無制限な声掛けを取り上げられてしまったのです。

一般車を運転する方の中には、駅伝大嫌い、無関心という人もおり、規制を無視して、車列に入り込みパトカーの警告に従わない人もいます。警察も「オイ、こら、どけ」でよかった時代は終わり、「ご協力ください」と低姿勢で説得これ努めています。

幸い過去3回とも選手や関係者、さらに観衆にも事故は無く、私の乗車した緊急対応車の出番はありませんでした。乗務するためには、前の晩からビールなど水分を控え、7時間近く座ったままで、見えるのは最後の選手の後ろ姿だけ、という大変体に酷な仕事でした。

箱根駅伝は、自宅で一杯やりながら、テレビ観戦が最もお勧めです。

エッセー 新上海から　的士（タクシー）に乗って

勝部（かつべ） 實（みのる）（元 丸紅）

「ニィハオ、ニィシ　リーベンレン　マ（こんにちは、お客さんは日本人か？）」

「どうして分かる？」

「日本人はいつもネクタイを締め、身なりがいいが、中国語の発音が悪いからな」

上海のタクシーは料金が安いうえに、乗車拒否はない。どこでも手を上げれば止まるから、重宝だ。初乗り3キロで、11元（160円）。日本の地下鉄やバスの料金と変わらない。

残念なことに、タクシーに日本車が1台もない。日中間の政治が関係しているようだ。殆どがドイツ製だ。フォルクスワーゲン社の大衆車「サンタナ」が大半を占める。シンプルで頑丈な造りだ。

2006年5月から延べ5ヵ月間、ABICの紹介で上海の日中合弁会社に単身赴任を経験した。夕食時には外食のため、毎晩のようにタクシーを利用していた。往復で22、3元。約百往復はしたから、日本円で3万2、3千円だ。日本でなら5倍は掛かった勘定だ。

上海の公共バスも途切れなしに運行している。料金は初乗り2元（30円）と安いが、一度タクシーを使うと、とてもバスなどに乗る気になれない。バスは混雑し、しかもスリが多い。冷房車も少ない。おまけに、日本漢字にない簡体文字が多いから、よほど慣れない限り、行き先さえ判読できない。

「日本のどこから来た？　東京か、大阪か、それとも名古屋か？」

「東京からだ。名古屋をよく知っているな！」

「名古屋万博があったじゃないか、有名だよ。東京はいい所だろう？　上海はどうだ？」

長々とした質問攻めである。

「おれも東京へ行ってみたいな…。上海と比べてどうだ？　上海娘をどう思う？」

北京大学キャンパスで「日本語広場」の教え子たちと筆者（右）2006年9月末

「上海は素晴らしいよ。いま世界で一番元気がある都会だろう。若い女性も魅力的だよ。日本の娘に負けないよ」日中友好のためだ。とりあえず褒めたが、実感でもある。

「それは嬉しいな。あんたは良い日本人らしいから、忠告しよう。一人では南京へ行くなよ。分かっているだろう？　上海にいたほうが一番安全だよ」。親切なことだ。しかし伏線があった。

「ところで、日本人の独身の男を知らないか？　おれの娘が大学を出て勤めているが、おれに似て美人だ。あんたに会わせるから結婚相手を探してくれ」。眉唾ものだが信じることにしよう。

上海では一人乗車のときは、運転席の右隣りの頑丈なプラスチック板で仕切られた助手席に座るのが礼儀だそうだ。座るや否や話し好きな運転手は、待ってました、とばかりに話しかけてくる。少し勇気が必要だが、私は積極的に助手席に乗り込み、覚えたての中国語の練習相手に利用させてもらった。

「ところで、娘が日本に留学したがっている。日本が好きなんだ。トヨタ、ホンダ、ソニー、キヤノン、ニンテンドーは最高だ…」

とうとう本音が出た。日本や日本人が好きなのではない。日本の製品が好きなのだ。しかし、悪い気持ちはしない。日本の優れた技術や製品が、少しこじれた両国関係の改善に役立ってくれたら、それは喜ばしいことだ。

話は終わらない。目的地には、なかなか着かない。

筆者紹介：東京国際交流館の「日本語広場」講師として活動中。

ABICコーディネーター有志 上海へ！

布施（ふせ） 克彦（かつひこ）（ABIC 大学講座グループコーディネーター）

現在三菱商事の上海事務所に駐在するABIC元事務局長の宮内さんから声が掛った。コーディネーター10名が即反応し、外部参加者1名を加えた上海行きABIC旅行団がたちまち結成された。幹事役、高廣コーディネーターの尽力で旅行準備も円滑に整い、12月8日一行は上海へと飛び立った。

待っていた宮内さんのスケジュールは盛りだくさんだった。到着の日からさっそく行動開始。古き良き上海の中心街・外灘の由緒あるスポットを見学し、黄浦江岸のレストランで、早くも上海蟹との対面。川向こうに輝く陸家嘴高層ビル群の夜景を見ながら、やや高年齢層中心のグループながら、メンバー誰もがすこぶる元気。よく食べ、よく飲み、よくしゃべり、上海の1日目は飛ぶように過ぎていった。

黄浦江岸のレストラン前にて

翌9日も朝から、メンバーを乗せたマイクロバスは、大上海の東西南北を走り回った。歴史の上海、現代の上海、そして未来の上海が絶妙に配合された宮内さんによる密度の濃い行程企画は、誰をも飽きさせない。時にはバスを捨てて、超近代的空港ターミナルを思わせる上海南駅から地下鉄に乗り、近郊の新興住宅街へ。そして浦東空港とを結ぶリニアカーにも乗ることができた。加速に3分、減速に3分、そして最高時速431kmで走るのは1分程度。隣の高速道路を時速100kmで疾走しているはずの自動車が止まってみえる。30kmの区間を7分弱で走り抜けるリニアの旅は、ちょっと物足りないが貴重な体験となる。

2日目が躍動する上海に重点を置いた行程なら、3日目（12月10日）の見学は、追憶の上海が中心テーマだ。宋慶齢（孫文夫人）旧邸に始まり、紹興路の旧ロシア正教会へ。途中で休憩した書店喫茶では、お茶とともに広がる歴史の香りを満喫。以前近くに住んでいた孫文や張学良が、今でもその辺りを散歩していそうな気がする。旧ユダヤ人街から、旧日本人街へ。大陸に憧れ、戦前10万人いたという日本人の夢の跡も、古びた建物群に面影を残すのみ。新都市計画の前に、取り壊し寸前の運命と聞いた。

東京、神奈川、埼玉の山地を除いた部分に等しい広大な土地。川以外に障害物のない平原に、人口2,000万の巨大都市が広がっている。そしていまだにフルスピードで発展途上。人口13億の大中国の最先端を疾走する上海は、これからどうなるのだろうか。10年後、いや5年後の姿さえ想像に難い実験都市。上海を4日間で駆け抜けたABIC旅行団一行は、それぞれの上海的印象を胸に、12月11日夕刻無事成田に帰り着いた。

ABIC海外旅行団第1回目の試みは、高廣幹事の周到なる引率と団員各位の協力で大成功だった。そして何より、お世話になった宮内さんに「非常感謝」を連発せざるを得ない。

新会員登録票・アンケートを未提出の方はご協力願います。

当センターホームページ「賛助会員・活動会員入会案内」（http://www.abic.or.jp/register/index.html）の申し込み書にご記入のうえ事務局宛てお送りいただきますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先：Tel. 03-3435-5973
Fax. 03-3435-5979
e-mail mail@abic.or.jp
扇、道家

会員入会のお願い

国際社会貢献センターの活動にご賛同頂き、会員として資金的援助をしていただける
個人の方や企業、団体のご入会をお願い申し上げます。

種類	内容	年会費		
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体	一口	50,000円
		個人	一口	10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める個人、法人及び団体。	法人及び団体	一口	10,000円
		個人	一口	5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要	—	—

正会員

団体・法人（16社） （社名五十音順）

〈10口〉	㈳日本貿易会	伊藤忠商事㈱	住友商事㈱	双日㈱
	豊田通商㈱	丸紅㈱	三井物産㈱	三菱商事㈱
〈4口〉	㈱日立ハイテクノロジーズ			
〈2口〉	稲畑産業㈱	長瀬産業㈱	阪和興業㈱	
〈1口〉	協同木材貿易㈱	興和㈱	JFE商事ホールディングス㈱	蝶理㈱

個人（5名） （敬称略・氏名五十音順）

池上久雄　小島順彦　寺島實郎　宮原賢次　吉田靖男

賛助会員

法人（2社） （社名五十音順）

㈲イーコマース研究所　キーリサーチネット㈱

個人（316名）

下記は2006年11月以降ご登録お申し込み頂いた方です （敬称略・氏名五十音順）

〈2口〉	川俣二郎			
〈1口〉	青木一夫	浅田道明	薄葉徹郎	榎本盛明
	勘山悟	中村昂	西山勝昭	藤田敬子

活動会員 1,641名 （2007年2月28日現在）

e-mailアドレス・住所等の変更届けはお忘れなく！

e-mailアドレス・住所などの変更がありましたらご連絡ください。
転居先不明で返送される例が増えています。
e-mail：mail@abic.or.jp　FAX. 03-3435-5979

《お詫び》

Information Letter17号5ページ12行目、29行目の「東洋ファニチャーコンサルティング」は、「東洋ファニチャーリサーチ」に、お詫びして訂正します。